

研究課題	秋葉区における摂食嚥下機能評価システムの構築と効果の検討
支援番号	GC01720162
研究事業期間	平成 28 年 4 月 1 日から平成 30 年 3 月 31 日
助成金総額	539,560 円
研究代表者 (所属機関)	張替 徹 (社会医療法人新潟勤労者医療協会下越病院・リハビリテーション科)
研究分担者 (所属機関)	伊東浩志 (新津医療センター病院)、本田智子 (下越病院)、小林あかね (新津医療センター病院)、真柄悦子 (新潟市秋葉区役所健康福祉課)、豊島宗厚 (新津医療センター病院)、五十嵐修 (下越病院)
研究キーワード	摂食嚥下障害、機能評価、地域連携
研究実績 の概要	<p>【はじめに】脳卒中などの急性疾患による摂食嚥下障害に対する支援システムは地域連携パスの普及などにより整備されつつある。一方、在宅の高齢者、施設入所者では、摂食嚥下障害が生じても相談先がなく適切な対応が困難である。そこで、私たちは、地域における摂食嚥下障害者支援システムの構築をめざし多職種チームを結成して活動してきた。</p> <p>【目的】摂食嚥下機能評価とそれに基づく指導の効果・システムの課題の検討。</p> <p>【対象】2016年7月～2017年12月に摂食嚥下機能評価、指導を行った71名(男性37名 女性34名、平均年齢79才)。</p> <p>【方法】対象者の状態、摂食嚥下機能評価および助言の内容、郵送による3ヶ月後調査(嚥下に関する指標、助言の実行状況、評価・助言に関する評価)を検討した。</p> <p>【結果および考察】①対象者の状態 原因疾患は、脳血管障害が39%、認知症、神経筋疾患がそれぞれ9%だったが、残りは加齢など様々な疾患・状態であった。居住場所は在宅が90%、依頼元は自院が69%、他院20%だった。食事の摂取状況は、経口摂取が96%、食事は軟菜以下が40%を占めた。食事の際に行っていることは口腔ケア以外になく、摂食嚥下に関するリハはほとんど行われていなかった。②検査所見 92%に何らかの所見が認められ嚥下に関連する症状に基づいた被検者の選択は適切だったと思われる。③食事および摂食に関する指導と実施状況 85%に指導が行われており、追跡調査では、食事形態の変更、水分のとりみ付けは比較的実行されていた。④リハに関する指導内容と実施状況 63%に指導が行われていたが、追跡調査ではほとんど実行されていなかった。③④より食事や水分に関する指導に重点を置き、リハが必要なら専門職の介入を検討すべきである。⑤介入の必要性和新たに導入されたサービス 専門的介入52%、介護予防35%、対応不要13%だったが、介入が必要な方の15%にしか新たなサービスが導入されていなかった。介護予防事業への誘導や専門的介入を担う摂食嚥下専門職の充実が必要である。⑥摂食嚥下機能評価および指導に関する対象者・関係者の意見 役に立ったがほとんどで、現状で良いが多くを占めた。</p> <p>【まとめ】専門的介入を担う摂食嚥下関連専門職の不足という課題はあるものの、私たちが秋葉区で構築した摂食嚥下機能評価システムをモデルとして、新潟市のそれぞれの区あるいは地域で、同様のシステムを構築することが可能である。</p>